

最も短い詩としての俳句の性格（V）

山口青邨

俳句では報告的、説明的表現はまづいとされてゐる、近頃よく散文的表現を取るものを見るが、これはこの弊に陥ちてゐるものと言へよう、悪いといふことはないが効果的でないといふことが言へる。

また短いからどうしても調べをよくしなければならぬ、これは必ずしもなだらかといふことではない、人を感動せしめるやうな効果的調べをもつてゐなければならぬといふことである。

また一つの骨格を問題にするならば、その變形、即ちデフォルマシオンといふやうな繪畫に於ける技巧も用ゐられるであらう。

今、私はかういふことも考へてゐる、ある一つの事柄の軌跡とある事柄の軌跡との交叉點を以て現はすことによつてその瞬間の複雑性を効果的に出せないか——さういふ方法である。

このほか用語から來る感じ、眼で見た時、耳で聽いた時の感じ、さういふものが長い詩とか散文などに於けるよりもより敏感に考へられなければならない。